

「シカの脅威と森の未来 シカ柵による植生保全の有効性と限界」

"Threats of sika deer for the Japanese forest: what we know about deer-proof fences" edited by Yuri Maesako & Seiki Takatsuki

前迫ゆり・高槻成紀（編），文一総合出版，247pp，本体価格3,240円（3,000円＋税），（2015）

シカ（ニホンジカ）による森林・農作物への被害の増大，さらには植生の変化，とくに稀少植物の消失が連日のように報道される。しかし，その一方で，コメントとしてハンターの老齢化・減少での駆除の限界，捕殺してもジビエ料理への理解が進まないといったことが付け加えられる。根の深い，また広い分野にわたる研究課題だけに，多くの研究者がこのシカ問題に取り組み，関連書も数多く出版されている。

本書はこのシカ問題に取り組む植生学研究者たちが植生に対するシカによる被害，その脅威に直面し，植生保全のためにシカ柵を設置した実践の記録である。

第1章 シカは日本の自然を大きく変えた？

1.1シカ学事始め，1.2シカという動物，1.3植生への影響，1.4日本の植生へのシカ影響の広がり，第2章 各地のシカ柵でわかったこと，2.1日本の森林植生とシカ柵，2.2高山植生，湿地，ササ草原とシカ柵，第3章 シカ柵の効果を考える，3.1知床のシカ捕獲と柵と保護区の未来，3.2シカ柵の有効性と限界の3章と，3つのコラムからなり，これを編者の前迫ゆり・高槻成紀さんほか19名で分担執筆している。

植生学会で実施した「シカ影響アンケート調査」の結果をもとに，それぞれの地域での被害の実態調査と緊急対策としてのシカ柵での植生保全調査を北海道，東京，丹沢，奈良，大峰山，大台ヶ原，芦生，中国山地，四国，屋久島，それに南アルプスの高山植物群落，釧路湿原などで実施した結果である。植生学研究者にとってシカよっての貴重な植物，高山植生や湿原植生の消失を眼の前に

すれば，シカ柵で少しでも保護しようとの衝動にかられよう。その気持ちはよくわかる。実際，各地でのシカ柵での植物保護の有効例が示される。そんなにも無理をしているのなら，タイリクオオカミの導入，シカの完全な駆除をといった意見にも賛成したくなる。シカ害からの植生の保護にはシカ柵の設置だけでなく，シカそのものの駆除がもっと強く実行されているのではと思ってしまう。また，シカ個体群の生息数，土地利用のちがいが，移動といった行動調査はGPSの発達で大きく進んでいる。哺乳類研究者，行政との共同研究が望まれよう。世界遺産の知床では大規模なシカ柵とシカの駆除を行い，世界遺産としてのシカもいる自然をほぼ維持しているとされるが，延々と続くシカ柵は景観上よくない。

シカ柵が有効との判断で，より大きな面積シカ柵の設置が強調されると，それはシカ柵をつくらせてシカのいない「異常な」状態をつくりだすこと，他のけもの類の移動を阻害するといったことにもなる。「シカがいるのが自然」といわれると，それにも納得させられるのだが，そうするとシカと植物の共存をどう図ればいいのかであろう。

第3章で，このシカ柵の有効性とその限界が総括される。植生学研究者からの緊急避難としてのシカ柵設置の「有効性」と生態系を囲むことはできないという「限界」が述べられている。シカを完全に駆除してしまえば憂いはなくなるが，それは植生学研究者も望んではいない。その中での解決法の模索，シカ問題のむづかしいことがよく理解できる。

（渡辺弘之）

付記：本書は日本学術振興会の平成26年度科学研究費助成事業・研究成果公開促進費により出版された。